

夏目漱石の小説における タ形文末・非タ形文末の表現効果

石出 靖雄

1. はじめに

文末形式のタは、テンスとしての研究が進んでいる。時間という基準でタを分析するものである。本稿は、文末のタを、テンスという見方からではなく、小説の地の文に使用された際の効果という点から、分析する。テンスとしてタを研究する場合、想定している対象は主に日常生活で使用される「はなしあい」¹⁾のテキストである。しかし、次の例のような「語り」のテキストの文は、日常生活で使われることがなく、下線部のタの使用のされ方は「はなしあい」のテキストとは異なっている。

話せば今ならきつと分かって呉れたに違いなかった。(「花埋み」)

このように、日常生活で主に使用される「はなしあい」のテキストと小説などの「語り」テキストでは、言葉の使われ方に違いがある。本稿では、対象をいわゆる三人称小説の「語り」テキストである夏目漱石の『三四郎』『道草』に限定したうえで、「語り」のテキストに使われるタの性質と表現効果を明らかにするものである。

2. 「語り」におけるタ形文末の働き

タ形の用例を集め検討した結果、小説テキストの地の文における文末のタに

は、次の二つの特徴が考えられた。

- (1) 文の内容を対象化する
- (2) 時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる

(1) の、タが事態を対象化する表現であるという指摘は、これまでも作中人物の意識を対象化するという方面からなされているが、本稿では語り手と作中人物との関係に踏み込み、さらに(2)の性格と関係づけた。(2)は本稿の独自の主張である。これらの特徴について論じていきたい。

2.1 タ形文末による内容の対象化

工藤(1995:203)では、【1】のような例を提出したうえで、「過去形²⁾を使用すれば、作中人物の意識の対象化が起こって、内的視点そのものではなくなる。」と、波線部①②④について指摘している。

【1】 吟子は心の中で叫び続けた。①今1度生きている母に会って許しを乞いたかつた。②話せば今ならきつと分かつて呉れたに違いなかった。③母は心では吟子をとうに許していたのかも知れない。

「お前の顔は2度と見たくない」と言いながら、吟子が東京へ出立する朝、母は自分で貯えた小金とお守りを渡して呉れた。④もしかするとあの時から母は言葉とうらはらに吟子を許

していたのかも知れなかった。

(『花埋み』)

工藤(1995:204)では、「非過去形と過去形とは、<視点>の相違として対立すると言えよう」と指摘しているが、「語り」におけるタ形の特徴について、それ以上の分析はしていない。

波線部の①②の文末が、非タ形の「乞いたい」「違いない」であったならば、文の内容は吟子の内的独白として理解される可能性が高い。しかし、実際はタ形文末であるために、吟子の「乞いたい」「違いない」という感情や推定を別の表現者(語り手)が外側から対象化して語った表現として理解される。

非タ形にして主格の語を補うとすると、①であれば「私は」という一人称を表す語となる可能性が高い。引用文のようにタ形であれば、「吟子は」と三人称を表す語となる。但し、「語り」のテキストであるので、非タ形でも「吟子は」を補える可能性がある。この場合は、タ形文末のときと同様に吟子の感情を外側から表現していることになる。このとき感情形容詞「乞いたい」は、感情表出とはならず属性形容詞のように働くことになる。「語り」のテキストならば、このように非タ形でも「吟子は」という三人称の主語を補うことができるが、タ形の方が外から吟子の感情を語っていることがはっきりと感じられる。

これらのことから、タ形であることによって作中人物の「意識の対象化」がはっきりとなされているといえる。

なお、ここでいう対象化とは、「事態を、主体の意識が向かう客体として外からとらえる」ことを指すこととしたい。

内容の対象化は、推量の文末表現においても指摘できる。次の【2】の用例も同様の例である。

【2】(主人公健三の家に養父の島田が訪ねてきている。健三の妻は奥の間で寝ている。)

其時突然奥の間で細君の唸るやうな声をした。健三の神経は此声に対して普通の人以上の敏感を有つてみた。彼はすぐ耳を恃てた。

「誰か病気ですか」と島田が訊いた。

「えゝ妻が少し」

「左右ですか、それは不可せんね。何処が悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかつた。何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしかつた。従つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に対する同情を求めやうとは思つてみなかつた。

(『道草』四十九:148)

作中人物が回想して語っているという設定であれば、下線部は作中人物の回想意識を表した文と考えられるが、この文の場合コンテキストから作中人物の回想とは考えられない。「何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしい」という作中人物健三の推定内容に「タ」が後接した文だと考えられる。

一方、「何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしかつた」全体を語り手の推定とみる見方もあろう。その場合、「らしかつ」の部分は語り手の推定であり、健三の推定ではないということになる。つまり、健三が何を考えているかは語られていなくて、語り手の推定だけが語ら

れることになる。しかし、この引用部分の最後の文「健三も此人から自分の妻に対する同情を求めやうとは思つてゐなかつた。」という表現から、健三が「…知らないらしい」と推定していたことは明らかで、この見方はあたらぬ。

「知らないらしい」という健三の推定判断に「タ」が後接したと考えた場合、この文は作中人物の推定を含んだ語り手の語りと考えられる。健三自身が自分の推定内容に「タ」をつけるということは、回想の場合は考えられるが、それ以外では考えられない。そのため、ここでは語り手の語りと考えられるのである。つまり、健三が推定した内容を外側から別の表現者（語り手）が対象化して語った語りだと考えられるのである。

この推定の用例と同様のことが、【1】の②「話せば今ならきっと分かつて呉れたに違ひなかつた」、④「もしかするとあの時から母は言葉とうらはらに吟子を許していたのかも知れなかつた」という推定表現でもいえる。

以上のように、タ形の文は、素材の内容を表現者が対象化して語った表現であるといえる。また、非タ形のときに感情や判断を表出していた文は、タ形になると表出の文ではなくなるといえる。

2.2 時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる

次に動作性動詞を例にして検討する。

【3】（二人の女に、三四郎が興味を惹かれ見ている場面）

三四郎は慥かに女の黒眼の動く刹那を意識した。其時色彩の感じは悉く消えて、何とも云へぬ或物に出逢つ

た。其或物は汽車の女に「あなたは度胸のない方ですね」と云はれた時の感じと何処か似通つてゐる。三四郎は恐ろしくなつた。

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若い方が今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた。三四郎は二人の後姿を凝と見詰て居た。看護婦は先へ行く。若い方が後から行く。

（『三四郎』二の四：302）

【3】の下線部「二人の女は三四郎の前を通り過ぎる」「看護婦は先へ行く」「若い方が後から行く」は、非タ形の文末になっている。現在から未来にかけて動作が眼前で行われているのを、表現者が知覚しながら表現しているかのような、いわゆる眼前描写の表現である。それに対して波線部「若い方が今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた」の場合、今、その場で「落として行く」のを知覚しながら表現しているような文ではない。

一般的には、この「落して行つた」は「落として行く」動作が完了して過去になったと説明される。文末が動作性動詞の場合は、その説明のとおりであり、動作の終わった時点から「落として行く」動作全体を見渡した表現となる。これを別の角度からとらえると、その動作の全体を外から対象化した表現だということができる。非タ形の場合は、「落として行く」という、その時のその場での知覚を表出しているが、タ形の場合は、その知覚を対象化した表現となっている。

次の【4】の下線部「乗つた」「近寄つて来た」「通つた」という動作性動詞はタ形であるが、非タ形に替えたとしても眼前

で知覚しながら表現しているようには受け取れない。

【4】(主人公の代助が皆と芝居を見に行った帰りの部分)

三人の迎は来てみたが、代助はつい車を逃して置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂の勸を斥けて、茶屋の前から電車に乗つた。数寄屋橋で乗り易え様と思つて、黒い路の中に、待ち合はしてみると、小供を負った神さんが、退儀さうに向から近寄つて来た。電車は向ふ側を二三度通つた。代助と軌道の間には、土か石の積んだものが、高い土手の様に挟まってゐた。代助は始めて間違つた所に立つてゐる事を悟つた。

「御神さん、電車へ乗るなら、此所ぢや不可ない。向側だ」と教へながら歩き出した。神さんは礼を云つて跟いて来た。代助は手探でもする様に、暗い所を好加減に歩いた。十四五間左の方へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見付つた。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乗つた。代助はたつた一人反対の赤坂行へ這入つた。

(『それから』十一の8:195-196)

【4】のタ形の文末を非タ形にすると、尾上(1982:370)で「ト書き型」と言われている、事柄を時間順に列挙するような表現となる。この三つの文で表現される内容は、動き(変化)のある事柄であり、ある程度の時間が経過するので、語っているその瞬間だけで事柄全体を把握して語ることにはできない。「面倒だと思つて、嫂の勸を斥けて、茶屋の前から電車に乗つた」の文では、「嫂の勸を斥けて」から「電

車に乗るまで、ほんの数秒というわけにはいかない。そのある程度時間の経過している事柄を一瞬で、知覚しながら語ることにはできないのである。そのため、非タ形にしても眼前描写の語りと受け取れず、事態の列挙と感じられると考えられる。

これに対して、テキストどおりのタ形であれば、その場で知覚しながら語っているように受け取れないし、事柄が列挙されているようにも受け取れない。事柄が順々に継起していることが自然に語られている。これは、実際にある程度の時間の経過する内容全体をまとめて語っているからである。これは、タ形になったための特徴である。この特徴を「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」と呼んでおきたい。動きがあり、ある程度時間の経過する内容がタ形文末になるとき、この性質をもつ。

また、2.1で扱った感情表出の文や推定を表す文は、もともと時間の流れに関わらない文であるため、タ形の場合、対象化するということが「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」をもつということになるといえる。

ところで、この「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」というのは、対象化と関連する特性である。「そういう出来事だ」と対象化してはじめて、全体を把握することができるからである。動作性動詞の場合は、タ形文末が内容を対象化しているということを実感しにくい、実際は、動作の終わった時点から、その動作を対象化してとらえているのである。

ここまで、文末が内的意識(感情・推定)

を表すときと動作を表すときを検討し、タ形の特徴2点を論じた。

3. 小説テキストにおけるタ形文末・非タ形文末の表現効果

2において、「語り」のタ形文末の文には、(1) 文の内容を対象化する、(2) 時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる、という2点の特徴のあることを論じた。その結果、非タ形には、場合に応じて、眼前描写の表現になる、感情や推定を表出する表現になる、という点があることをあわせて指摘することになった。このような特徴によって、実際の語りにおいてタ形と非タ形が用いられた場合、表現上どのような効果もたらされるのか、動作性動詞の文末・テイル文末・デアル文末を取り上げ、検討する。

『三四郎』地の文全体4632文³⁾のうち、非タ形文末の文は、2279文で全体の49.2%であった。内訳は、テイル形524例(テイル形とテイタ形の合計のうち74.6%)、デアル形35例(デアル形とデアッタ形の合計のうち70.1%)、ノダ形27例(ノダッタ形の用例はなし)、動作性動詞の非タ形528例(非タ形とタ形を合計したもののうち23.5%)。その他の非タ形1118例(非タ形とタ形を合計したもののうち71.9%)であった。これに対して、『道草』地の文全体3337文のうち、非タ形文末の文は72文で2.2%であった。『道草』の非タ形の内訳は、「のである」が47例、疑問形・推量形9例、倒置文9例、「そうである」2例、「ている」1例、「ものである」1例、「からである」1例、「違ひない」1例、体言止め1例である。動詞の終止形、形容詞の終止形の非タ形の例はない。このよ

うに「のである」以外の非タ形はごくわずかといってよい。

3.1 『三四郎』における動作性動詞

次の【5】の下線部①～③は、非タ形の文のうち、語り手が三四郎を観察しながら語っているような動詞文の例で、③は三四郎の内面について語っている動詞文の例である。

【5】(三四郎が上京する際、初対面の広田先生と汽車の中で話をしている場面。)

けれども相手はそんな事に一向気が付かないらしい。やがて、

「東京は何所へ」と聞き出した。

「①実は始めてで様子が善く分らんのですが……差し当り国の寄宿舎へでも行かうかと思つてゐます」と云ふ。

「ぢや熊本はもう……」

「今度卒業したのです」

「はあ、そりや」と云つたが御目出たいとも結構だとも付けなかつた。たゞ「すると是から大学へ這入るのですね」と如何にも平凡であるかの如くに聞いた。

三四郎は聊か物足りなかつた。其代り、

「えゝ」と云ふ二字で挨拶を片付た。

「②科は？」と又聞かれる。

「一部です」

「法科ですか」

「いゝえ文科です」

「はあ、そりや」と又云つた。③三四郎は此はあそりやを聞くたびに妙になる。 (『三四郎』一の一七:289)

引用部分は、会話が中心となっている部分で、その中に下線部①と②の非タ形の文がある。会話の流れの中にさらに眼前

描写性のある非タ形の文があるため、より臨場感をもって三四郎について語るという効果がある。③は三四郎の内面の解説であり、反復される動作である。この表現は、眼前描写性はないが、「タ」による対象化がないために、語り手が物語世界に身を置いて語っているかのように感じられる。そのため、やはり臨場感のある表現となっている。このように、非タ形で語り手が三四郎の動作を語ると、語り手が物語世界に身を置いてるかのように臨場感をもって語っている印象を与えるという効果がある。

この場面の場合、もう一人の作中人物の広田先生については非タ形で語られることがほとんどないため、三四郎の動きだけがクローズアップされる効果がある。

動詞の非タ形では、三四郎の知覚・認識を利用した語りでも、語り手の語りでも、非タ形のときは、物語世界の時間の流れを感じながら臨場感をもって語られることになる。タ形の動詞が連続すると、事態が次から次への素早く展開することになるが、非タ形の動詞が混じることによってそうではなくなる。『三四郎』における動作性動詞文末の文は、非タ形23.5%、タ形76.5%と、非タ形は少ないが、効果を発揮している。

また、三四郎の知覚・認識を表している文や、三四郎について語る文が多く非タ形になり、その部分だけが臨場感をもつことになる。三四郎がクローズアップされた語りになる。実際に、三四郎の知覚・認識を表す非タ形の文の多いことが確認されており⁴⁾、三四郎の知覚をとおして事態の進行が表現されることが多い

と考えることができる。

3.2 『三四郎』におけるテイル・テイタ形

テイル形は、現在継続している状態、または効果が継続している状態を表現者が知覚し、その知覚を表出した表現である。テイタ形は、「事象が継続している」という知覚内容を、表現者が外側から対象化して語っている表現である。このようなことから、テイタ文末はその場で知覚している印象を与えない表現となる。

次の【6】の下線部は、『三四郎』において語り手が三四郎について語ったテイル文末とテイタ文末の文である。

【6】 三四郎は思ひ出した様に前の停車場で買った弁当を食ひ出した。

車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸しの頭を啣へた儘女の後姿を見送つてみた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛である。(『三四郎』一の二:275)

【6】の「食つてゐる」という非タ形の文は、語り手が、物語世界のその現場でそのときに、観察しながら語っているかのような表現である。「見送つてみた」の方は知覚・認識を表出している表現ではないので、眼前描写性がない。そのため、語っている場所や時間は物語世界のその場でなくてもよい。また、タ形であることによって、「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」があり、その知覚・認識をひとつのまとまった出来

事として対象化して語る表現となっている。そのため、冷静な印象も与えている。その結果、それまでの状態を「…見送つてみた」とまとめて簡潔に語ったうえで、「…食つてゐる」という部分は現場での臨場感をもって語ることになっている。この結果、「…食つてゐる」ことがクローズアップされることになる。

次の【7】の下線部は、『三四郎』における、三四郎の知覚と考えられるテイル文末の文である。

【7】所へ窓の外を楽隊が通つたんで、ついで散歩に出る気になつて、通りへ出て、とうとう青木堂へ這入つた。

這入つて見ると客が二組あつて、いづれも学生であつたが、向ふの隅にたつた一人離れて茶を飲んでみた男がある。三四郎が不図其横顔を見ると、どうも上京の節汽車の中で水蜜桃を沢山食つた人の様である。向ふは気がつかない。茶を一口飲んでは烟草を一吸すつて、大変悠然構へてゐる。今日は白地の浴衣を已めて、背広を着てゐる。然し決して立派なものぢやない。

(『三四郎』三の五:319-320)

このテイル文末の文は、三四郎の知覚でとらえた状況を語っているといえる。そのため、読者は語り手の存在を意識せずに、三四郎の知覚したとおりに臨場感をもって物語世界に接することができる。

これに対して、テイタ文末の文は異なる表現効果をもつ。次の【8】のはじめの下線部は、主人公健三の知覚を利用した語り手の語りと考えられるテイタ形の用例で、二つめの下線部は、語り手の語りと考えられるテイタ形の用例である。

【8】健三が眼を塞いでうつらうつらしてゐると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりですか」
「飯なんか食ひたくない」

細君はしばらく黙つてみた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行かうとはしなかつた。

「あなた、何うかなすつたんですか」

健三は何にも答へずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めてみた。細君は無言のまゝ、そつと其手を彼の額の上に加へた。

晩になつて医者が来た。

(『道草』十:28)

これらの下線部の文は、知覚・認識を表出している表現ではないので、語る場所や時間は物語世界のその場でなくてもよい。そのため、物語世界の現場から離れて冷静に事実を客観的に語っている印象を与える。

また、テイル・テイタ形の出現の状況を、『三四郎』と『道草』の冒頭からそれぞれ15% (『三四郎』830文、『道草』510文) で調査したところ、次の【表1】のような結果となった。なお、表の左の項目は、「…ている」「…ていた」と知覚したのは誰かということを示し⁵⁾、「内的独白」は作中人物の内的独白を指す。

【表1】

『三四郎』「ている」「ていた」

	ている	ていた	合計	割合
語り手	9	26	35	29.9%
視点人物	69	9	78	66.7%
内的独白	4	0	4	3.4%
合計	82	35	117	

『道草』「ている」「ていた」

	ている	ていた	合計	割合
語り手	1	52	53	81.5%
視点人物	0	12	12	18.5%
内的独白	0	0	0	0.0%
合計	1	64	65	

【表1】から、語り手が知覚するか、作中人物が知覚するかということにおいて、両テキストには傾向の違いのあることがわかる。『三四郎』は『道草』に比べて、視点人物が事態の状態を「ている」「ていた」と知覚している場合が多いといえる。特に、眼前描写性のあるテイル形が多い。このことから、『三四郎』では、事態の状態を語る時、視点人物三四郎が知覚・認識していることを眼前描写として語ることが多いと考えられる。そうであれば、読者は三四郎の立場になって物語世界の状態を読み進めることが多くなるといえる。それに比べて、『道草』では語り手の立場からのテイタ形ばかりが使われており、臨場感は感じられず、語り手が冷静で客観的な態度で物語世界の状態をとらえている印象を与える。

3.3 『三四郎』におけるデアル・デアッタ形
文末表現デアルは、表現者が自分の断定の判断を表出する表現である。

前出【6】の波線部の用例は、語り手の判断を表出した非タ形のデアル形の用例である。この用例は、語り手が現場で知覚・判断しているかのような語りである。

デアル形には、この用例とは異なり、次の【9】のように具体的な現場の時間にとられない内容の語りもある。

【9】 彼は講義は駄目だが、図書館は大切だと主張する男である。けれども主張通りに這入る事も少い男である。

(『三四郎』三の六:332)

この場合には、語り手が必ずしも物語世界のその現場にいるかのような表現にはならない。しかし、いずれの場合も、語り手の判断が表出され、語り手の存在が強

く意識される点では一致している。

それに対して、タ形のデアッタ形は、判断の内容が対象化されるため、判断の表出ではなくなる。次の【10】の下線部は『道草』のデアッタ形で、語り手の判断と考えられる用例ある。

【10】健三はすぐ眼をそらして又真正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色なく、じつと彼の通り過ぎるのを見送つてみた。健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しづつ動いて回るのに気が着いた位であつた。 (『道草』一:4)

この用例では、物語世界の事態について事実を冷静に語っているように感じられ、そのため、語り手の存在が強く意識されることはない。

また、次の【11】の下線部は、三四郎の判断と考えられるデアル形である。

【11】髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑つた。三四郎はそれを機会に、「あなたは何方へ」と聞いた。「東京」とゆつくり云つた限である。何だか中学校の先生らしく無くなつて来た。けれども三等へ乗つてゐる位だから大したものでない事は明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をした儘、時々下駄の前歯で、拍子を取て、床を鳴らしたりしてゐる。

(『三四郎』一の六:286-287)

このようなデアル文末の文は、作中人物の知覚・思考を反映した文である。このような文では、読者が語り手を媒介とせず、作中人物の知覚・意識を知ることになる。

『三四郎』では、デアル形が82例でデアッタ形が35例であった。『道草』では、デアル形の用例はなくデアッタ形が72例であった。このことから、『三四郎』には語り手の断定判断が表出されたり、三四郎の知覚・思考が反映されたりするデアル文末の文が多く含まれていると考えられる。それに対して、『道草』はデアッタ文末の文しかないため、表現者や作中人物の断定判断は表出されず、事態を冷静に客観的に語っているような印象を与える表現がなされるといえる。

3.4 『三四郎』におけるタ形と非タ形の表現効果

これまでタ形の特徴として次の2点を指摘した。

- ①文の内容を対象化する
- ②時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる

また、非タ形は、場合に応じて次のような特徴があることを指摘した。

- ③眼前描写性
- ④感情や知覚・判断の表出

さらに、以上のことが具体的テキストの中では、次のような効果を与えることを指摘した。

タ形は、①の特徴から、表現者が事実を冷静で客観的に語っている印象を与える。

またタ形は、②の特徴から、タ形が連続すると事態が順々に継起していくさまが語られ、展開が速くなる。

いっぽう非タ形は、③④から、表現者が物語世界の現場で知覚・判断しながら語っているような印象を与える。このとき、知覚・判断の主体が作中人物である場

合は、作中人物の知覚・判断が語り手を媒介とせず読者に伝わる。知覚・判断の主体が語り手の場合は、実際には物語世界に存在しないはずの語り手が現場で語っている印象を与える。いずれにしても臨場感のある語りとなる。また、事態が速く展開していくのを抑える効果もある。

また、テキストにおける非タ形とタ形の出現状況は次のとおりであった。

『三四郎』はテイル形とテイタ形がおよそ7:3の割合、デアル形とデアッタ形がおよそ7:3の割合、動作性動詞の非タ形とタ形がおよそ3:7の割合で出現する。

以上のタ形・非タ形の表現効果と出現状況から、『三四郎』は、読者が物語世界の現場に臨場感をもって接する部分を多く持ち、また、非タ形とタ形の混在によりストーリー展開の速さが調整されたり、ある部分が強調されたりするテキストだと考えられるが、ほとんどの文末がタ形である『道草』は、冷静で客観的に語っている印象を強く与えるテキストと考えられる。

4 おわりに

ここまで、文末形式のタを、三人称小説の「語り」テキスト『三四郎』『道草』を対象として、その表現効果について検討してきた。テンスという基準での検討では至らなかった、(1) 文の内容を対象化する、(2) 時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる、というタ形の特徴を出発点として、非タ形の眼前描写性、感情・知覚・判断の表出という特徴を導き、さらに、タ形には冷静で客観的な語りの印象を与える効果のあること、非タ形に

は臨場感のある語りの印象を与える効果のあることということを導き出した。そして、これらの表現効果から、『三四郎』と『道草』の表現上の特徴の違いにまで踏み込むことができた。

【注】

- 1) 工藤(1995:19)では「発話行為の場へのアクチュアルに関係づけられたテクストのタイプ」とされる。金水(1989)では「報告」と呼んでいる。
- 2) 本稿のタ形を指すと思われる。
- 3) 文章の引用、発言の引用などは地の文として数えていない。
- 4) 『三四郎』の冒頭から15%の830文の地の文を調査したところ、非タ形文末の文は372文で44.8%であった。この中で、三四郎の知覚や認識を通した非タ形文末の文は308例であった。このことから、『三四郎』冒頭部の非タ形文末の文は、ほとんどが三四郎の知覚や認識を通した表現であるといえる。
- 5) 作中の視点人物がその内容を知覚していると考えられるものは、すべて「視点人物」の項目に入れ、一つの例を「語り手」と「視点人物」の両方に入れることはしなかった。

【引用テキスト】

- 渡辺淳一(1970)『花埋み』河出書房新社
遠藤周作(1958)『海と毒薬』文藝春秋新社
『漱石全集 第五巻』(1994)岩波書店
『三四郎』(初出は1908)
『漱石全集 第六巻』(1994)岩波書店『それから』(初出は1909)
『漱石全集 第十巻』(1994)岩波書店『道

草』(初出は1915)

【参考文献】

- 糸井通浩(1986)「物語・小説の表現と視点」『表現学論考第二』
糸井通浩・半沢幹一編(2009)『日本語表現学を学ぶ人のために』世界思想社
井上 優(2001)「現代語の『タ』—主文末の『…タ』の意味について—」『「た」の言語学』ひつじ書房
尾上圭介(1982)「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1巻2号 1982年12月 『文法と意味Ⅰ』(2001)くろしお出版
金水 敏(1989)「『報告』についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
佐藤武義(1991)「漱石の文体—文末表現を中心として—」『文章研究の新視点』明治書院
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
仁田義雄(1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版

【付記】

本稿は、第47回表現学会全国大会での研究発表を加筆修正したものである。皆様から有益な助言を賜りましたことを心より感謝申し上げます。

(学習院女子中・高等科)